

たか はし ひろ のぶ
高 橋 宏 宣

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 359 号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学 位 論 文 題 目	太宰治の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 佐 藤 伸 宏 教 授 佐 倉 由 泰 准教授 横 溝 博 准教授 片 岡 龍

論 文 内 容 の 要 旨

序章 本研究の目的

三島由紀夫は太宰治の文学と人間性を激しく攻撃した。三島の太宰批判―「弱点」を「強味」へもっていく価値転倒的操作の批判―には、ニーチェが「道德の系譜」「アンチクリスト」で試みた価値転倒的道德批判の影響がある。三島は太宰の価値転倒的操作を「性格的欠陥」によるものとし、太宰に初めから内在していた本質的なものと捉えていたようだ。本研究は、三島の批判した「弱点」をそのまま「強味」へもっていく価値転倒的操作が、ある時期太宰によって意識的に作り上げられたものであることを明らかにすることを目的とする。本研究は習作から中期までの太宰作品を辿り、その価値転倒的文学世界がどのように成立し展開したのかを究明するものである。

なお、本章には本研究に関連する主な先行研究をまとめてある。

第1部 習作の可能性と限界

第1部は太宰の習作（大正十四年～昭和五年）を研究対象とし、全能への志向・生家への愛・マルキシズム思想への共鳴の鼎立が習作の特徴であったことを明らかにした。

第1章 全能なるものへの憧憬―青森中学時代―

太宰治の習作は小説に限っても二十三篇ある。青森中学二年（大正十四年）以降、ほぼ六年にわたって発表された習作はテーマも完成度もばらついているが、青森中学時代の習作に限ってみれば全能への志向が顕著である。最も古い習作である「最後の太閤」（青森中学校『校友会誌』第34号、大正14年3

月24日)では、一代で権力の頂点に登りつめて栄華の絶頂を極めた秀吉の全能感を描いている。「地図」(『蜚気楼』大正14年12月)では、全能の恍惚感が湿度の高い自尊感情に反転していく。これら初期習作の登場人物の自尊感情は、全能への志向と表裏一体である。「負けざらひト敗北ト」(『蜚気楼』大正15年1月)では、勝てない相手との勝負の場の価値を相対化する新しい勝負の場を捏造してまで勝者になろうとする姿が描かれる。これら全能への志向は、初期習作段階における太宰文学の根源的なものと言える。

第2章 生家への愛とマルキシズム思想の共存—弘前高等学校入学以後—

弘前高等学校入学後の習作「哀蚊」(『弘高新聞』6、昭和4年5月)では、「婆様」に大切にされた幼年期の記憶が描かれる。「百万の身代」を築いた「婆様」は老いてなお枯れることのないエロスの欲望を持ち、「私」を裸で抱いて寝る。幼年時代の「私」は自身の身体を「婆様」に供することで、「家」への強烈な帰属意識を得ていたのであった。「哀蚊」は自らを繋留しておく全能的な拠り所との関係を軸に物語を起動した最初の成功作である。「虎徹宵話」(『獵騎兵』6号、昭和4年7月。後に改稿を経て、弘前高等学校『校友会雑誌』(15号、昭和4年12月)に掲載)は、マルキシズム思想の著しい影響下に書かれた。太宰にとってマルキシズム思想とは、混沌とした現実の中にあって明瞭で正確な見通しを授けてくれる外部の「知」であり、太宰が強く惹きつけられたのは、そのような思想の全能性であった。太宰は「地主一代」(『座標』昭和5年1月、昭和5年3月、昭和5年5月)で、「マルクス主義」を理解する有能な地主—全能なる主体—の誕生を試みたが挫折した。

昭和五年の上京後、太宰は左翼運動へ深く加担する。一方、同年に小山初代を上京させ、郷里を騒然とさせている。政治運動と駆け落ちは、マルキシズム思想への深い信頼と、最下層の女性の救済というヒロイズムに基づいて決行された。しかし、結婚前の初代の過失を知ることにより太宰の自信は揺らぎ、左翼運動の実質的に唯一の果実であった初代救済を自らの象徴空間に位置づけておくことができなくなった。その結果ヒロイズムは空洞化し、この一点へと流れ込んでいた過去が崩壊した。かくして、全能にはなり得ない自分を作品の中でどのように肯定的に描いていくのかという課題から『晩年』世界は澎湃として興ることになった。

第3章 習作における「皮膚」の表象—弘前高等学校時代の作品から—

太宰の作品には他者にまなざされる顔や皮膚がよく出てくる。「股をくぐる」(『細胞文芸』昭和3年7月)は韓信の股くぐりに題材をとった作品だが、韓信の皮膚病を描いているのが特徴的である。韓信の皮膚病は、内面の煩悶が肉体の表皮へ現れ出たものであり、「腐つた肉」や巢食う「虫」、流れ出る「膿」は、韓信自身どうすることもできない「自尊心」の隠喩として描かれている。「彼等と其のいとしき母」(『細胞文芸』昭和3年9月)では、皮膚病を状況と心理の函数として描き、「哀蚊」(『弘高新聞』第6号、昭和4年5月13日)の皮膚は、接触を介して他者との関係を確認し、他者への帰属を意識する場であった。弘前高等学校時代に発表した作品で、太宰は、皮膚をめぐる言説を操ることにより、自己と他者との関係を記述していく方法を模索していたと考えられる。

第2部『晩年』世界の成立と展開

第2部では、習作の限界を太宰がどのように克服し、『晩年』世界を立ち上げたのかについて、昭和七年から昭和十一年までに書かれた作品を対象として論じた。ヴェルレエヌの影響を受けて価値転倒的操作を獲得したことにより文学的出発を果たした太宰が、聖書の影響のもとに自らの生の意味を確認す

るまでを論じた。

第4章 『晩年』世界の成立—「葉」を視座にして—

『晩年』劈頭の「葉」（『鵲』昭和9年11月）は三十六の断章から成り、もらった着物に合わせて「夏まで生きてゐようと思」うほど生の主体性を失った男の回復の軌跡をそこに認めることができる。しかし、生の意志回復に連なる断章へと回収できないものがあり、その断章では転倒的あるいは倒錯的な関係が述べられる。この転倒性や倒錯性は、昭和五年の「学生群」第四回（『座標』昭和5年11月）中絶以後、新たに獲得され、自らの文学性の根幹を形成するものにまで高められたものである。この転倒性を太宰がどのように獲得したのかについて本章は論じた。

「葉」のエピグラフのヴェルレエヌ詩は、堀口大学著『世界文学大綱9 ヴェルレエヌ』（昭和2年2月、東方出版）、または同一内容の『ヴェルレエヌ研究』（昭和8年3月、第一書房）中の堀口訳詩集「智慧」（原題は「Sagesse」）から引用されたものである。引用部分を含む「第12章「智慧」及び文学生活」には、引用元の詩集「智慧」の「序文」も訳されており、太宰はこれも読んだと考えられる。この「序文」には、ヴェルレエヌが自己の「弱点」と「墮落」の自覚のもとに神との間に生き生きとした関係を結び、文学的再生を果たした経緯が述べられている。太宰はこの「序文」の、ヴェルレエヌが信仰に至った順番を逆に辿ることによって、つまり、文学的再生をはかるためには自らの「弱点」や「墮落」を正面から扱う必要があることに思い至り、その結果、弱さこそが正しさに通じるという転倒的な文学性を獲得したのではないと思われる。この結果、習作時代の全能への志向は反転し、全能になり得ない自分を主題として押し出すことが獲得されたのではないかと考えられる。

第5章 「ロマネスク」の転倒性—到達不可能なものとしての「世間、との関連において—

「ロマネスク」（『青い花』昭和9年12月）を構成する三篇は決して父と子の和解へと向かわない。共同体の秩序を代表する父の期待を内面化しない以上、子供たちが共同体から脱落していくのは当然である。しかし、共同体からの逸脱に対し、程度に差はあるものの、子供たちは不全感を抱いている。彼らが「修行」で身につけた技は全能的であり、状況を一度に変革できる点において同じであるが、これは自分を取り巻く状況に対する不全感と表裏一体である。彼らは見かけやふるまいとは反対に、自らの属する共同体との齟齬に関して敏感である。そして彼らは、「修行」で獲得した技により共同体の秩序を踏み越えることを欲しながら、最終的にはその内部を志向するという転倒を演ずる。

「ロマネスク」の「世間、は、そこから逸脱し始めた時に不全感とともに立ち現れてくるものとして描かれている。彼らにとって「世間、とは、受け入れられることを望みながら決して正しく到達できない場である。しかし、「世間、に正しく到達できないことを先取りしてしまえば、「世間、に受け入れられずにもがくことが目的となり、やがて「世間、はもがくことを実現するための手段へと後退する。登場人物はもがくことによって「世間、に受け入れられない疚しさを免責し、「世間、の通俗さに回収されない純粹さも得、その結果「世間、を批判的に対象化できる自分の立場を正当なものと思ふようになる。三郎の「芸術家」宣言にはその一端を認めることができる。

第6章 外傷化される出生—太宰治のキリスト教受容と傷の象徴化をめぐって—

太宰が本格的に聖書と取り組み始めた時期は昭和一〇年三月以降と推定される。昭和十年と十一年の文学的多産は聖書受容と関係があり、それは思想や文学性を深化させる重要な契機となったと考えられる。

「狂言の神」（『東陽』昭和11年10月）では、生家の「大地主」が「悪、とされ、出自が外傷化される。

また、左翼運動からの離脱・転向は「私ひとりが逃げた」こととされ、自分の逃亡で仲間全員が落命したと、転向体験を原罪化する。鎌倉の自殺未遂は、多くの者に自分を「審判」させるための「破廉恥」な方法を選んだ結果とされ、これは半生の自傷化である。「虚構の春」(『文芸春秋』昭和11年7月)では、転向体験の原罪化と出自の外傷化が更に深耕され、「唯物論的弁証法」への信頼が追加される。そして「私を葬り去ること」が「建設への一步」であるとし、逆説的に生の肯定が試みられる。

「HUMAN LOST」(『新潮』昭和12年4月)は魂の傷痕として書かれた。この時期の太宰にとって、傷は自分が自分であることの根拠であった。太宰は傷を繋ぎ合わせることによって自らの存在の意味を象徴的に理解し、自らの生を世界の中で意味づけた。傷は自分が世界と結びついている印なのであり、だから、自分で自分を傷つける自傷的にして自滅的傾向が、この時期の作品に出現してきたのであった。それは「二十世紀旗手」(『改造』昭和12年1月)の「(生れて、すみません。)」や「罪、誕生の時刻に在り」という出生自体を罪とする言説で完結する。

第3部 確立された叙法

第3部では、方法的多様性を追求していった昭和十三年から二十年までの中期作品を対象に、太宰の方法論的な試みを個々の作品ごとに分析した。第3部では価値転倒的操作の問題に限らず、語りの問題、知性の限界の問題、翻案の問題についても論じている。

第7章 「姥捨」論—先送りされる別離と再生の論理—

「姥捨」(『新潮』昭和13年10月)は、心中に至った原因に仕末をつけた顛末記ではなく、心中失敗後の生の可能性に向けて書かれた物語である。冒頭部分で既に嘉七とかず枝の関係修復は不可能であることが暗示されている。別離の他に選択肢がない、換言すれば、別離すれば済むにもかかわらず、二人は一緒に死んで夫婦の永遠性を確保しようとする。「姥捨」では夫婦の実情とそれを解決するための方法とがねじれており、特に嘉七はこのねじれに意味があるかのようにふるまい、ねじれを自分で作り出していく。

しかし、心中は失敗し、嘉七は生き残る。この帰結を嘉七は「厳粛な事実」と受け止め、神さまの「生きよ、との判断だと理解する。嘉七はかず枝の介抱に全力を尽くすが、嘉七の目に映ったかず枝は「人の姿ではな」い異形の他者であった。嘉七は「子供」のように「無力」な自分がかず枝と共生することは不可能だと得心する。しかし、嘉七はかず枝への有責を自覚している以上、この有責感を何らかの形で解消しなければ、別離後も心理的にかず枝との関係を引きずってしまう。そこで嘉七はかず枝との別離を自分の能力を超越した存在に命運を託してその決定を受け入れた結果だとし、「無力」で「子供」の自分が成熟するためにはそうするしかないと考える。そうした過程が世間一般で「あたりまえ」という理由で、かず枝との別離の是非を不問にしてしまう。嘉七は、心中の失敗とかず枝の異形という二つの出来事に特別の意味を与え、別離後の可能性だけを捉えることにより、かず枝との別離の根拠を作り出したのであった。

第8章 「富嶽百景」論—二つの再生をめぐる—

本章は「富嶽百景」(『文体』昭和14年2月、3月)の「私」が、市井人としての人間性の再生だけでなく、作家としての文学性の再生も果たしたことを示し、二つの再生が主題となっている点について論じた。此作の冒頭部では一種猛烈に富士が否定される。富士は計量化され、象徴性を剥ぎ取られてただの山とされる。その富士と「私」は毎日「対談」していくことになるが、不変の富士と毎日向き合っ

いるうちに「私」の野放図な揺らぎは修正されていく。富士とそれを享受する者との定型的な関係を否定する「私」は、誰も知らない富士の発見に向かい、結末で富士は「酸漿」に似た山として描き出され、既存のイメージに回収されない新たな象徴性を帯びた山として差し出された。これにより、「私」は既存の強固な意味の体系を組み替えることに成功し、文学性の更新に成功した。

第9章 「女生徒」論—甘えの機巧と幸福の仮構—

太宰治は愛読者の日記を素材として「女生徒」(『文学界』昭和14年4月)を執筆した。この日記が『資料集第一輯有明淑の日記』(平成12年2月、青森県近代文学館)として翻刻・公開され、「女生徒」本文との比較が可能になったことを受け、本章は素材から作品へ成稿する過程で改変された三点をもとに、「女生徒」作品の孕む問題を考察した。

愛読者の日記は四月三十日から八月八日までの三ヶ月強に渡るが、「女生徒」では五月一日の起床から就寝までの出来事に加工されている(第一の改変)。愛読者は満十九歳であったが、「女生徒」の「私」はそれより二〜三歳若く設定され(第二の改変)、大人でもなければ子供でもない年代特有の心の揺れや不安定な心理が描き出されることになった。「女生徒」の多くの部分は愛読者の日記をコラージュすることによって成立しているが、冒頭部と最終部だけは太宰の加筆である(第三の改変)。冒頭部には次々と小箱を開ける身振りの喩えが記され、これは間が持たないと嫌だという「私」の意識のアナロジーとして解釈できる。「私」の饒舌な語りとは「わかってほしい……という未練によく似た甘えとうらはらに発生する」「甘えの流通問題」(佐藤信夫)なのであって、自分のことを分かって欲しいという意識の裏返しなのである。その甘えは、自らを「王子さまのゐないシンデレラ姫」と謎めいた存在として読み手に示し、その謎に読み手を誘い込む結末部において完結する。無邪気に戯れてくる「私」の若々しい饒舌な語りの裏には、相手に気を使い、相手に自分をわかって欲しいと必死に訴えるかそけき悲鳴が隠されている。

第10章 「皮膚と心」論—転移する「皮膚」、—

「皮膚と心」(『文学界』昭和14年11月)の「私」は皮膚病になったのち精神に恐慌を来していくが、この皮膚病恐怖は作品を読み解く重要な鍵と思われる。本章は皮膚病を契機として皮膚が他者との関係性を媒介する場に変換されていく過程を考察した。

「皮膚と心」の設定には旧約聖書「ヨブ記」の影響がある。「ヨブ記」を参照しつつ分析すれば、「皮膚と心」とは、皮膚病によって空間性や他者との関係性が切り詰められていく中、他者とどのように関わることができるのか、その場合に主体の自我はどのような様相を呈することになるかを問題とした作品だと言える。作中で皮膚病は「腐った肌」と言い換えられ、美しい肌への固着を見出すことができるが、それからは、容貌において強い劣等感を持っていた「私」が化粧品によって美しい肌を産み出し、その優越感で自己同一性を支えていたことがわかる。その化粧品の図案を「あの人」が手がけていると知り、「あの人」を夫として受け入れたのである。その肌が崩壊した今、「あの人」と暮らしていた「まへの女のひと」が激しい嫉妬とともに思い出されてくる。皮膚病は「私」の自尊心の存立基盤を瓦解させるだけではなく、同性のネットワークに、皮膚の優越感で優位に参入し得ていた既得権も失わせた。

此作での「皮膚」は、異変によって、一つの身体部位から、他者との関係性が脅かされる場へと転位する。皮膚病で他者との関係が失調し、内面が揺らぐように、「皮膚」と「心」は相互可変的に連関し、一方の変化が他方の変化を不断に生み出すという関係性のダイナミズムを構築している。

第11章 「駄込み訴へ」論—「あの人」の教化とユダの限界をめぐって—

「駄込み訴へ」（『中央公論』昭和15年2月）のユダが「あの人」を裏切ったのはなぜか。本章は一度深く帰依しながら裏切るよりほかに選択の余地がなくなったユダの精神の狭隘化の過程について論じた。

この作品には二箇所しか改行がない。ユダは、かなりの緊張・興奮状態にあっても、「あの人」との関係について内容を整序しつつ語ることができる知的な男である。ユダは最初「あの人」を理想像として見出した。ユダの最終的な願いは、「あの人」とその母マリア様と三人で暮らすことである。この構図は、ラカンの指摘した、鏡に映った自分の像を見て喜悅する主体とそれを見守る母の視線にはかならない。だから、「あの人」との同じ年齢、「違ひが無い」ことが繰り返し強調されるのである。しかし、理想像への同一化は原理的必然として「自己の主人性を他者と争う闘争の過程」（福原泰平）となる。

「あの人」は、理解できないことは理解できないままに受け容れよ、そこに神の意思があるのだからと教えたが、高い知性と商才、現実処理能力に恵まれたユダは、本来理解不能なものまで理解可能なものとして知的に処理せずにはいられず、「あの人」の教えに従うことができなかった。「あの人」がユダに課したのは、自己の知性の限界を自覚することであったが、ユダにはそれができなかった。「あの人」の真意を「意地悪」としか理解できなくないユダの知性は限界に達し、「あの人」との関係を根源的に破壊したいという衝動に駆られ、「駄込み訴へ」たのである。

第12章 「走れメロス」論—王のための物語として読む—

「走れメロス」（『新潮』昭和15年5月）のメロスは、知性に基づいて状況を分析し、出来事の結末まで見通してから決断を下すような思弁的人間ではない。メロスは単純で無欲で感情的な男である。王デイオニスは極度の人間不信に陥っているが、それは人間に本心を納める内面があると思い込み、その「腹綿の奥底」と口に出る「清らかな事」とのずれが気になって仕方がないからであった。メロスに言わせれば、王の不信とはありもしないものを見透かす「惻巧」な者の「自惚れ」にすぎない。内面の病に苦しみ、そこから逃れる方法を知らない王に、メロスは「腹綿の奥底」など幻想の産物でしかないとを教え、王を不信の病から救った。此作は、内面のない無欲な男が人間の信実とは何かを副産物として示した物語である。

第13章 「清貧譚」論—江戸の風物との関わりを中心に—

「清貧譚」（『新潮』昭和16年1月）は、冒頭に作中作家の「私」が登場し、「聊齋志異」中の一篇を読んで想像力を刺激されて書いたと明かすが、その結果書かれた「清貧譚」の舞台は日本の江戸時代である。この変更によってもたらされた収穫について考察したのが本章である。江戸時代には実生による菊の珍種が作られ、菊の栽培は中国をも凌駕したと言われる。化政期になると庶民には菊見の習慣が生まれ、菊花壇や菊細工が観賞の対象となるとともに、菊は一攫千金の夢をかけた人々の投機や利殖の対象となった。「清貧譚」には江戸の風俗や地理が描き込まれ、それが才之助の内面の変化していくきっかけになっている。頑なであるがゆえに孤独な男が、愛情を知り、敬意を抱くことを学んで世間との交わりを回復していくために、江戸の時空間はなくてはならない背景なのであった。

第14章 「惜別」論—「周さん」を語り出す「私」をめぐって—

『惜別』（昭和20年9月、朝日新聞社）は、日本文学報告会小説部会の「大東亜共同宣言」五大原則作品化のために出版された経緯があり、太宰の作品の中で特別視される傾向がある。此作は田中卓という老医師の書いた「手記」という体裁を取り、田中医師の「胸底」にある「周さん」の「真実」を「正し

く書き残して置く」という表明のもとに書き進められている。「私」（田中卓）は魯迅が「藤野先生」で言及したことに疑義を呈し、自分の記憶を「藤野先生」に書かれていない真実だとして読み手に提示する。この仮構された真実に読み手を誘い込んでいく手法に『惜別』の特徴を見出した。

論文審査結果の要旨

本論文は、太宰治の昭和初年代・10年代、所謂前期および中期の小説作品を主たる対象として、その固有の小説世界の成立と展開の様相について精緻な考察を加えたものである。本論文の目的を提示した序章に続く本論部分は3部構成のもと全14章からなり、末尾には「本研究の成果と課題」について述べた終章が置かれている。

序章は、価値転倒的操作を太宰の小説の方法と見做した上で、習作から中期に至る小説をとおしてその価値転倒的文学世界の成立と展開の過程を解明することを本論文の目的として提示する。第1部「習作の可能性と限界」ではその方法成立の前史として習作期の作品が取り上げられる。第1章「全能なるものへの憧憬」および第2章「生家への愛とマルキシズム思想の共存」は青森中学、弘前高校在学中の初期習作を考察対象として、全能への志向をそこに一貫するモチーフとして指摘し、生家への執着やマルキシズムへの傾斜もそれとの相関において生じた事態であったこと、またその試みが初期小説の破綻を不可避免的に導いたことを明らかにする。第3章「習作における“皮膚”の表象」は習作に現れる「皮膚」の表象を太宰における小説の方法の追求の一端を示すものとして位置づけている。第2部「『晩年』世界の成立と展開」では『晩年』とその前後の時期の小説作品を対象として価値転倒的操作の成立の経緯が問題とされ、第4章「『晩年』世界の成立」、第5章「「ロマネスク」の転倒性」、第6章「外傷化される出生」の3章をとおして、「葉」「ロマネスク」「狂言の神」「虚構の春」「HUMAN LOST」等の分析に基づき、価値転倒的方法の確立の過程、および逆説的に獲得される生の肯定という太宰の基底的主题の成立が明らかにされる。第3部「確立された叙法」では、価値転倒的操作を基底としつつ生み出された中期小説の多様な方法的試みが作品論的分析をとおして解明されている。第7章は「姨捨」について、かず枝との別離を実現し心中失敗後の生の可能性を求める嘉七の物語として読み解き、第8章は人間性と文学性の二つの再生を主題化した「富嶽百景」の作品構造を周到に解明している。第9章から11章では、「女生徒」の語りの方法、「皮膚と心」における皮膚の表象が作中で果たす機能、「駈込み訴へ」のユダの心理にそれぞれ分析が加えられる。第12章は「走れメロス」を王デイオニスの物語として新たに読み解き、第13章では「清貧譚」における翻案の方法を、第14章では『惜別』における魯迅ならぬ「周さん」について語る「手記」の構造を解明している。

太宰治の研究は現在も旺盛に進められているが、本論文は、前期・中期の小説の総体を視野に入れ、太宰の方法的追求を軸としてその展開の道筋を鮮明に跡付けつつ中期作品の豊穡な方法的成果に周到な分析を加えており、斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。